

魯迅とその時代 東京大学文学部教授 丸山 昇

『魯迅と日本』（魯迅生誕110周年仙台記念祭実行委員会編）より転載

魯迅は、1881年（清、光緒7年）、浙江省紹興に生まれた。本名は周樹人、もう少し正確にいうと、少年時代の本名は樟樹、樹人というのは1898年南京の学校に入る時につけた名、魯迅は1918年「狂人日記」を発表する時に使い、以後彼の最も代表的な名となった筆名である。

紹興

紹興は上海の西南、直線距離で約160キロ、杭州湾の南岸から20キロほど南に入った町、古くは春秋時代、呉越の戦いで有名な越王勾践が都を置いたところ、さらに古くは禹が葬られたとも伝えられ、紹興の東南4キロの会稽山麓に「禹陵」がある。現在では老酒の名で日本人にも親しまれている紹興酒の産地である。

家とその没落

魯迅の生家である周家は、紹興の中心から少し南東寄りの東昌坊口にあった。現在わかっている限りでは、14代前の先祖が、明の正徳年間（1506～21）に2人の息子を連れて移住してきたのが最初という。やがて商業によって富を蓄え、第6代の祖が官吏登用試験である「科挙」に合格して「挙人」となった。このころまでには地主にもなっていたものと思われる。そして祖父周福清は、科挙の最高段階の試験にも合格したエリートの「進士」で、北京で役人をしていた。周家は数代前に大きく三つの家に分かれ、それぞれ近くに屋敷を構えていたが、魯迅の属した「新台門」も、広い屋敷地に白い塀を巡らしたかなりの邸宅だった。昔の中国の、旧家の例にもれず、周家も大家族だった。新台門だけでも、魯迅の曾祖父の従弟の曾孫、つまり魯迅からみて十親等にあたる人までが同居していた。当然そこにはよどんだ空気と、陰湿な人間関係、偽善で飾った蔭での利害の争いがあった。

1893年（光緒19年）秋、一家にとっての大事件が起こる。祖父の入獄である。この年の初め、祖父の母、魯迅からいえば曾祖母が死去したため、祖父は帰郷していたが、秋に行われた郷試を受験する息子（魯迅の父）鳳儀と友人たちの息子数名のために、かねて知り合いだった試験官に賄賂を贈ろうとしたことが発覚したのである。旧暦の年末、「斬監候」の判決が下った。斬刑だが執行を延期し、あらためて決定があるまで拘禁しておく、というもの。減刑になる可能性もあるが、逆に毎年死刑が行われる季節である秋には、執行を恐れなければならない。それを避ける工作に、周家はかなりの財産を費やしたようである。一方魯迅も、累が及ぶことを恐れた親たちの配慮で、母の実家に預けられた。

翌年の初夏のころ家に帰るが、その冬、追いうちをかけるように父が重病にかかる。魯迅の小さいころ、家にはまだ4、50畝（2.4～3.0ヘクタール）の田があったが、父の発病のころには20畝あまりになっていた。祖父の事件の打撃がわかる。こうして、父の医師と薬の費用のため魯迅が質屋と薬屋に通う生活が始まる。「まずまずの暮らしから貧窮に陥った人なら、その過程で、たぶん世間の人の本性を見ることになるだろう」（「呐喊自序」）と彼は後年書いている。

結局父は96年秋に死去、祖父は1901年春に釈放され、04年死去した。

南京遊学

1898年5月、魯迅は南京の江南水師学堂に入学した。これより先魯迅は6歳ごろから家塾で、11歳からは近くの「三味書屋」で伝統的な教育を受け、16歳までに「四書」「五経」は読み終わっていたという。江南水師学堂は「洋務運動」（アヘン戦争以後列強の侵略を受けたことで科学とりわけ軍事技術の立ち遅れを知った清朝内部の開明的官僚によって推進された、近代科学・工業振興政策）によって創立された「新式学堂」の一つで、名前のとおり海軍の知識・技能を教育する学校だった。魯迅がここで学ぶことにしたのは、家に代表される古い世界からの脱出という動機が働いていたことはたしかだろうが、ここに一族の大叔父の一人が教授兼監督をしていたことも作用していたようである。

しかしこの学校の内容は旧態依然たるもので、それに不満を感じた魯迅は半年足らずでここを退学、同じ南京の江南陸師学堂付設の砒務鐵路学堂に入学する。この時彼は一旦帰郷して、県試を受験し合格している。科挙の前提となる最初の試験で、県試・府試・院試の三つに合格すると、「秀才」となり、「挙人」になるための郷試を受験する資格が得られる。正式には科挙の予備試験とでもいうべきものだが、「秀才」になることが実質的には科挙の第一段階として意識され、社会的にも重んじられていたことは、「阿Q正伝」や「孔乙己」にも描かれている。

一方で「新式学堂」に入りながら、一方で科挙を受験するというのは、明らかに矛盾だが、これも魯迅にとって古い社会というものが、一度の行為によって簡単に決別できるものではなく、多くの屈折を伴わざるを得なかったことを物語っているのだろう。

新思想との出会い

砒務鐵路学堂は、水師学堂と同様、洋務運動によって創立された学校だったが、魯迅にとって持った意味は違った。物理・化学、地質学、鉱物学など初めて学ぶ学問が新鮮だっただけでなく、この学校で彼は初めて嚴復の「天演論」や、変法派の新聞などに触れた。魯迅が南京に出た年の1898年（戊戌の年にあたる）には、戊戌政変が起こっていた。洋務派による軍備の近代化にもかかわらず、1894、5年の日清戦争で、新興の小国日本に敗れたことは、問題が軍備だけにあるのではなく、政治のあり方にあることを示す、という考えから、明治維新にならった政治制度の上からの近代化が必要だとする康有為・梁啓超らが、光緒帝

の信任を得て政治を刷新しようとしたものの、西太后等の保守派のクーデターによって失敗、光緒帝は幽閉され、康有為・梁啓超は日本に亡命した。康・梁等を変法派というが、砒務鐵路学堂の校長がこの流れに属する人物であったため、校内でその新聞が読めた。また嚴復は、当時西洋近代思想の主要な著作を精力的に翻訳した人、「天演論」はT・ハクスリーの「進化と倫理」の翻訳である。進化論は古代の聖賢の世を理想とする儒教的歴史観にとっては、革命的な意味を持ったが、特に列強との戦いに相次いで敗北していた清末においては、清朝を構成する満州族も、それに支配されている漢民族も、ともに列強との生存競争に敗れ、弱者として淘汰されてしまうのではないかと、という警告を与えるものとして受け取られて、当時の知識人に深刻な影響を与えた。魯迅もこの頃これを読んで、「世界にはこんなにも新鮮な考え方をしている人がいたのか」と思ったと後に書いている。

日本留学

1902年1月（旧暦では前年12月）砒務鐵路学堂を卒業した魯迅は、留学生として日本に派遣されることになり、4月日本に着くと、その月の末に弘文学院に入学した。同校は清国留学生に日本語と基礎的科目の教育を施すためにこの年に創立されたばかりの学校で、校長は東京高等師範学校長で柔道の講道館の創立者としても知られる嘉納治五郎だった。彼はこの普通速成科を04年4月に卒業すると、9月、仙台医学専門学校に入学した。本来は東京帝大の工学部採鋁冶金工学科に入学すべきものだったのを、自分の意思で医学を選んだのだという。医学を選んだ動機として、彼自身は、父が病気の時の体験を通じて漢方医は信頼できぬと思ったこと、日本の明治維新に新しい医学が大きな役割を果たしたことを知ったことをあげている。

反清革命への高まりの中で

仙台医学専門学校に入るのと前後して、反清の革命団体光復会が組織され、魯迅も入会している。光復とは異民族である満州族に征服されていた漢民族の光を回復するという意味である。ちなみに1945年、日本の敗戦で日本の占領から解放されるとき、中国人は、やはり光復という言葉を使った。光復会は浙江省出身者たちが作った団体だった。会長は、紹興出身の先輩蔡元培だった。

洋務運動・変法運動と、改革の試みが続けられてきたものの、こうした体制内改革では対応できないほど清朝の危機は深刻になっていた。特に1900年の義和団事件で、清朝の列強に対する無力さが露呈されると、清朝自体を打倒しなければ、漢民族には未来がないという考え方が強くなり、日本留学生の中でも、変法派に代わって革命派が力を持つようになってきていた。魯迅もその例外ではなかった。

光復会に加わりながら、やがて彼が独り文学を選んだことにも現れているように、魯迅の思想には、当時の多くの政治青年とは違った要素がすでに見られるが、一方彼はそれらの青年と決別したわけではなく、彼らとの交友と一種の連帯は、仙台時代以後にも続き、革命前に犠牲となった青年男女への思いは、後の彼の思想・文学にも大きな影を落とすことにな

る。

魯迅と仙台

魯迅は仙台に1904年9月から06年3月までいた。1年半という年月は長くはないが、魯迅にとって大きな意味を持った時期だった。仙台時代については、1930年代から仙台の魯迅愛好家たちによって、断続的に事跡と資料の調査が行われていたが、特に50年代に入学願書など貴重な資料が発見され、さらに73年「仙台における魯迅の記録を調べる会」が発足、直接魯迅に関わるもののほか、藤野先生に関するものなど、周辺の資料が大量に明らかにされた。

魯迅にとって仙台時代が持った意味のうち主要なものとしては、藤野先生との出会いと、文学への志望の変更を挙げねばならない。

藤野先生と魯迅

藤野先生は名を巖九郎といい、仙台医専の解剖学の教授だった。身辺を飾らぬ人で、魯迅に講義のノートを提出させて詳細に赤を入れるなど、温かく指導した。魯迅が志望を文学に変更して仙台を去るとき、彼は自分の写真の裏に「惜別」と書いて魯迅に与えた。魯迅はそれを書斎の壁に掲げ、仕事の合間にそれを仰ぎ見ては、仕事への意欲をかきたてた、という。魯迅は後年回想記風の短編集「朝花夕拾」を書いたとき、1篇を割いて「藤野先生」と題し、彼の作品の翻訳が岩波文庫にはいることになったとき、作品の選定について相談した訳者の増田渉に、すべて委せるが「藤野先生」だけは入れて欲しい、といった。

魯迅が去った後、仙台医学専門学校は、1912年東北帝国大学医学専門部となり、さらに1915年東北帝国大学医科大学となった。藤野先生は愛知医学校卒業という学歴であったため、医科大学教授の資格に難点ありとされて辞職、16年仙台を去った。日本の医学及び医療制度の近代化のはざまに生じた犠牲者だったというべきだろう。藤野先生は東京で1年あまり病院勤めをした後17年秋ごろ郷里の福井県本庄村下番に帰った。17年、りか夫人を失い、18年、文（あや）夫人と再婚、その生家の三国町に移って開業、晩年は三国町に家を持ち、本庄村中番に診療所を設けてそこに通う生活を続けた。

魯迅はこのような藤野先生のその後を知らぬままに死去する。下番出身の坪田利雄は東京に出て労働運動に加わり、逮捕拘留を経て健康を害し、故郷に帰って少数の有志とともに読書会などをするうちに、魯迅の「藤野先生」を知り、これは自分が診察を受けたこともある巖九郎先生に違いない、と地方新聞記者の牧野久信・川崎義盛とともに魯迅の葬儀の記事の出ている雑誌「文学案内」を持って先生を訪問、藤野先生の話をもとめた文章「謹んで周樹人様を憶う」と訪問記を「文学案内」37年3月号に発表した。

藤野先生は敗戦直前の45年8月11日、自分の診療所から、懇意にしていた下番の土田氏宅に出向いて倒れ、そこで息を引き取った。61年福井市足羽山公園に先生が魯迅に贈った

「惜別」の文字を刻んだ「藤野巖九郎碑」が立てられ、また現在芦原町になっている郷里に、町立の藤野先生記念館が建てられている。

文学へ

魯迅は、1906年3月、仙台医専を退学して東京に戻った。この年の夏いったん帰国して母の取り決めた伝統的な形の結婚をし、秋の初め、新婚の妻は郷里に残し、弟の周作人ともなって東京に帰った。文学運動としては、雑誌「新生」を計画したが流産に終わる。しかし、彼がこの雑誌に書くつもりだったと思われる内容は、07年から08年にかけて他の留学生が発行していた雑誌「河南」に発表した一連の論文から知ることができる。「文化偏至論」「魔羅詩力説」「破悪声論」などがそれである。その内容を簡単にいうことは難しいが、強いてまとめれば、はげしい反逆精神を持った詩人が心からの声を発することで、素朴な民衆の中にまだ生きているはずの心を動かすというイメージを描き、そのような予言者にも近い「詩人」の例をヨーロッパ文学から紹介・顕彰することで、中国にも同様の詩人の誕生を促す、といったものだった。彼は周作人の協力も得て、当時の日本で読むことができた多数の文献を渉猟してこれらを書いた。「魔羅詩力説」で彼が触れている文学者は多数にのぼるが、中でも最も情熱をこめて書いているのが、ギリシャの独立運動の援助に赴き、かの地で死んだ英国の詩人バイロンだったことが、彼の抱いた「詩人」像をよく語っている。「魔羅」というのも、バイロンらが「悪魔」派と呼ばれたことを受け、そのサンスクリット語の音訳を用いたのであり、「悪魔派の詩の力について」とでもいうべき論文であった。

ところで、医学から文学へ志望を変えた動機については、魯迅自身が語る有名な話がある。細菌学の講義の際幻灯が用いられたが、時間があまると折から日露戦争中でその場面を描いた幻灯が映されることがあった。ある時映された幻灯に中国人が日本軍に処刑される場面があった。ロシア軍のスパイを働いたのだ、という説明だった。そのまわりには、それを無感動に見物する中国人が映っていた。それを見て、精神が懦弱な国民は医学では救えない、精神の病を治すもの、それは文学だ、と思った、というのである。（「呐喊自序」「藤野先生」）。魯迅は複雑な心境を割り切って説明したり、逆に重大な意味を持つ事柄をさりげなく書いたりすることが多いので、このエピソードにあまり大きなウエイトを置いて、魯迅の文学を「愛国の文学」といった言葉の中に押し込めてしまうとすれば、それは、かえって魯迅の文学を単純に考えすぎる危険に通ずるだろう。人がどうして文学のようなものに志すようになったかは、本来簡単な言葉で説明できるようなものであるはずがない。魯迅の場合も、小さい時から神話や物語への興味が強かったことを物語る資料が数多くあり、幻灯事件に近い事実があったとしても、そうした下地がなければ、文学への志が突如として生まれてくるはずもなかった。ただその点に注意したうえで読めば、魯迅が語る上述のエピソードは、単純化した形を通じてやはり魯迅の文学・思想の重要な一面を伝えているといえる。魯迅はバイロンのギリシャ人に対する気持ちを、「その不幸を哀れみ、その争わざるを怒る」と表現したが、それは彼の中国人に対する気持ちでもあった。

ただこれらの論文も、あまり反響はなかったらしい。当時の留学生の多くの関心は、政治経済などに向いており、文学に関心を持つものは少なかった。

魯迅は、弟の周作人といっしょに、ヨーロッパの短編小説の翻訳「城外小説集（09）」を

出したが、これもあまり売れなかった。彼はおそらく満たされぬ心を抱いたまま、09年夏帰国する。

辛亥革命とその結果

帰国した魯迅は、杭州の浙江両級師範学堂、紹興中学堂の教師をつとめる。杭州では古い教育方針を押しつける校長に対して、教員や学生とともに反対運動をやって勝つ、という事件もあったが、教員としては熱心に生理学や化学を教えていた。

11年10月、辛亥革命が起こる。その波は浙江省にもすぐ伝わり、11月杭州で民軍が蜂起した。杭州光復の報が紹興に伝わったのは11月5日頃だった。市内の寺院で大会が開かれ、魯迅は議長に選出された。ここで彼は反革命の反撃に備えて武装した遊説隊を組織し、革命の意義を宣伝することなどを提案、自らその一隊を率いてパトロールをするなど、かなり積極的に行動している。ただ魯迅自身は後に夫人の許広平に、当時大したことはしていない、ただ嬉しかった、と語っている。

12年2月、彼は1月に成立したばかりの中華民国臨時政府の教育部長になった蔡元培の招きに応じて南京に出、教育部員となり、5月、政府の移転にともなって北京に移った。「あのころはたしかにずっと明るかった。当時私も南京の教育部にいましたが、中国の将来には大いに希望があると感じていました。もちろん当時悪い連中もいましたが、ともかく彼らは敗北したのです。」（許広平あて書簡、25.3.31）

しかしこの期待は長く続かなかった。辛亥革命を担った革命同盟会には十分な実力がなかったため、袁世凱をはじめとする軍閥の力を借りねばならず、あらゆる面で彼らと妥協せねばならなかった。中華民国大総統になった孫文は、1カ月で袁世凱に大総統を譲り、7月には革命同盟会出身の閣僚が辞職する。袁世凱は御用政党の共和党を結成、革命同盟会も国民党を組織して対抗するが、民衆的基盤も弱いこの党には、軍閥に対抗し得る力はなかった。8月には各地で反袁世凱の軍が蜂起する「第二革命」が起こったが敗北、孫文は日本へ亡命する。北京では袁世凱政権の特務機関である軍警執法処によって多数の人が行方不明になるなど、その独裁体制が強められていた。約10年後に彼が「阿Q正伝」で書いたように、地方でも実権を握っているのは、革命前と変わらぬ有力者たちだった。袁世凱は15年に帝制をしいて皇帝となることを企て、反対運動の高まりにあって果たさず、16年に死んだものの、その後も軍閥政権が続く。

こうして革命にかけた魯迅の期待は裏切られる。彼は古碑拓本の収集や、散逸していた古書の整理・校勘などの仕事に沈潜していた。

「文学革命」

しかし、現実の動きは魯迅がこのような沈潜を長く続けることを許さなかった。15年には日本が袁世凱政権に21箇条要求を突きつけ、承認させた。14年から始まった第1次世界大

戦で、欧米列強がヨーロッパの戦闘に忙殺されているのに乗じて、中国に進出して権益を拡大しようとしたのである。中華民国は内外ともに多難であった。こうした中で陳独秀によって15年に創刊された「青年雑誌」（1年後に「新青年」と改題）は、文化・思想の革新の呼びかけ、儒教批判と白話文（口語文）の提唱を2本の柱とする「文学革命」が、辛亥革命以後の現実に危機感を抱いていた人々の心を次第にとらえようとしていた。

魯迅は、はじめこうした動きに必ずしも心を動かされなかったらしい。「私は当時“文学革命”にたいして、実はべつに熱情を持っていたわけではなかった。」辛亥革命以後の一連の事件を見て懐疑的になり、失望していたのだ、という。「ただ私はまた自分の失望をも疑った、私を見た人々、事件は極めて限られたものであるから。この考えが私に筆をとる力を与えた。」（「自選集」自序）。彼は日本留学時代からの友人で当時「新青年」の同人であった錢玄同の求めに答えて18年「狂人日記」を発表したのを最初に、「孔乙己」「故郷」「阿Q正伝」など第1小説集「呐喊」（23年）に収められた小説を書く一方、鋭い社会・文化批評を次々に書いた。これらの小説は、「病態社会」を題材にしたと自らいうように、迷信や古いしきたりなどにとらえられて傷つき、人間らしい生命力を失っている人物を主人公にし、出口のない現実を描きながら、その救いを模索するものだった。留学時代に描いた、詩人の呼びかけによって人々が動かされる、といったややロマンチックで観念的なイメージが辛亥革命以後の現実によって否定された後、もう一度中国社会をリアルに見つめなおす営みでもあった。

小説家としての魯迅

教育部門としての勤務、作家としての創作の他、このころ彼は北京大その他で非常勤講師として「中国小説史」を講じている。詩や文に比べて一段低いものとされていた小説に、彼は早くから関心を持ち、すでに紹興の教師時代、散逸していた小説の断片を集めて再構成する仕事をしてきた。それらの上にとって、神話伝説から清末までの小説史を講じたもので、それをまとめた「中国小説史略」（24年）で、中国最初の小説史であり、今日でもこの分野の古典となっている。

「彷徨」と「野草」

文学革命は、知識人特に青年に大きな影響を与えた。儒教批判は従来の中国文化の根幹に対する批判だったし、口語の提唱も単なる表現の改革ではなく、文化を支える価値観そのものを揺るがすものだった。

19年5月4日、「54運動」が起こる。第1次大戦が終結しヴェルサイユ会議が開かれたが、列強は中国の期待に反して日本の21箇条要求を追認する態度をとったため、北京の学生3,000余名が条約調印拒否を求めて集会・デモを行い、親日派政治家の家を焼くなどの行動に出た事件である。運動は全国に波及、中国現代史に時期を画する運動になった。直接の動機は外交問題だったが、深部において文学革命と通じあっていたことは疑いない。

もう一つ当時の中国に大きな影響を与えたのが、17年のロシア革命だった。レーニンのソビエト政府が、帝政ロシアが中国から得た権益を返還することを宣言したことは、知識人・青年に強い共感を呼びおこした。そうした中から、陳独秀・李大釗などマルクス主義を積極的に受け入れる人々が出、彼らによって21年中国共産党が結成された。一方最初に口語文を提唱した胡適らはこうした動きをむしろ警戒し、学生は研究室に帰れと主張、伝統文化の再評価に向かった。文学革命の陣営に分裂が生じたのである。この時期が54退潮期と呼ばれる。「『新青年』の団体は散り散りになり、あるものは出世し、あるものは隠遁し、あるものは前進した。同じ陣営内の仲間もかくも変化することがあり得るのだということ、私はまたしても体験した。」（「自選集」自序）。こういう心境の中で書いたのだが、「祝福」「孤独者」などの第2小説集「彷徨」（26年）である。また24年から26年にかけて書いた散文詩「野草」もこの時期の作品である。自分の内面にある矛盾、暗いものを見つめて表現したもの。形式も多彩であり、象徴度・凝縮度の高さにおいて、彼の作品中独特であり、重要な位置を占める。

論争の魯迅 女師大事件

「彷徨」「野草」と比べ、始まりはやや遅れるが後半は並行して女師大事件が起こる。北京女子師範大学で、新任の女性校長の古い教育方針に反発した学生たちが校長に反抗した事件である。北京の文化界も当局側を支持するものと学生を支持するものに分かれた。魯迅は学生を支持して論陣を張り、当局側を支持する学者とはげしい論争を行った。このことで彼は教育部長章士釗に教育部員を罷免されるが平政院に提訴して争い、勝訴して復職している。文学革命当時の彼の評論も鋭いものだったが、当時のそれが中国社会の一般的な文化傾向に対する批判であったのに対して、この時期のものは具体的な論敵との論争であり、学生の闘争の前途にも直接関わるものであったので、特にはげしいものになった。彼の文章は時に人身攻撃・泥仕合すれすれの論争のなかで、独特の文化的緊張を持った「雑感」と呼ばれるスタイルを生み出し、これはその後彼の著作の主要な部分を占めることになる。

3.18事件

女師大事件が学生側の勝利に終わった後、26年3月18日、日本など列国の干渉に抗議し、時の段祺瑞政府に毅然たる態度を求めた市民や学生の「請願」デモに、軍隊・警察が発砲し、四十数名の死者と150余人の負傷者を出した。死者には、女師大での教え子劉和珍・楊徳群の二人も含まれていた。魯迅はその知らせを受けたとき書いていた「花なきバラの2」の筆を途中で改めて、痛烈な抗議を発し、その文末に「民国以来最も暗黒の日」と記したのを始め、「劉和珍君を記念する」その他一連の文章を書いて政府とそれを支持する文化人をはげしく非難した。「私は自分の住んでいるのが人の世ではないと感ずるばかりだ。四十数人の青年の血が私の周囲に満ちあふれ、ほとんど呼吸をすることも見聞きすることもできなくしている」（劉和珍君を記念する）。この事件は、辛亥革命当時に体験した先輩あるいは同世代の死とはまた違った、魯迅がその後何度も体験した、自分の周囲の若者の非業の死、これの最初の体験であり、彼に一段と強い衝撃を与えた。この時に書いた一連の文章は、政治的憤りと人間的怒りの見事な統一として、彼の雑感中でも一つの頂点をなしてい

る。

しかしこの事件では魯迅の身边にも危険が及んだ。軍閥政府の出した大学教授ら50人の逮捕令には彼の名もあった。彼は一時住まいを転々として難を避けた後、8月北京を出て廈門に向かった。

朱安と許広平

このころ魯迅の心境に大きな変化が一つ生まれつつあった。許広平との愛の始まりである。許広平は北京女師大での教え子の一人で、25年春、彼女からの手紙を最初に、二人の間に文通が始まっていた。当初は学問・人生に関わる問いかけに魯迅が答えるといった性格を出ないものだったが、次第にその間に愛が生じてくる。女師大事件も二人の気持ちを接近させる役割を果たしたようである。

魯迅に06年結婚した妻がいたことは、先に触れた。この妻朱安との結婚は、母の意思によって取り決められたもので、魯迅は彼女に愛情を感じられなかったらしい。彼は19年に書いた「随感録40」の中で、愛のない結婚をした青年から来た手紙にこと寄せて、しかし女性にはもともと罪はない、とすれば新しいモラルに目覚めた男性としては、彼女らとともに自分の1代を犠牲にして、4,000年来の旧習を終わらせるしかない、と書き、心境の一端をのぞかせている。しかし、許広平との関係は、25年夏ごろから次第に愛というべきものになったらしい。魯迅は26年11月20日の許広平あての手紙で、自分はこれまで愛に思い至るといつも自分にはその資格はないと考えてきたが、それほどまでに自分を抑えねばならないことはないと思うようになった、「私は愛してよいのだ」と書いて、自ら禁じていた愛を自分に許すことになる。

一方朱安は魯迅が廈門に去った後も魯迅の母とともに北京に残る。典型的な旧社会の女性だった彼女には、周家の嫁として母に仕えるしか生き方はなかった。27年秋上海に移った魯迅が許広平との生活を始めたことは、彼女にはさすがに打撃だったらしいが、29年魯迅と許広平との間に海嬰が生まれた時は、自分にも死後を祭ってくれる息子ができたと喜んだ、という。43年魯迅の母を送り、47年死去した。

廈門・広東・反共クーデター

魯迅が廈門に行ったのは、廈門大学の招きに応じたものだった。このとき女師大を卒業して郷里の広東で教師になる許広平も上海まで同行し、上海でそれぞれ別の船に乗った。しかし、彼は間もなく俗物的な廈門の空気に失望する。広東の許広平と交わした手紙が慰めでもあり、また自分も広東に移ろうという思いを強めるものでもあった。27年1月、彼は中山大学の招きを受けて広東に移る。

当時の広東は革命の根拠地だった。24年孫文が容共政策を採用したことで国共の統一戦線が成立、25年夏には北京の軍閥政府に対抗して、広東に国民政府が成立、26年7月蒋介石

石を総司令として国民革命軍の「北伐」が開始されていた。北伐軍は民衆の支持も得て順調に進撃、26年中には、武漢、九江などを収め、南京・上海を除く揚子江以南をほぼ制圧した。

しかし、蒋介石は27年4月12日、反共クーデターに踏み切り、共産党員及びその同調者に対する弾圧を開始した。広東でも4月15日弾圧が始まり、中山大学の彼の学生の中からも逮捕者が出た。魯迅は中山大学主任会議で逮捕青年の救出を主張したが容れられず中山大学教授を辞職、ひきこもって「野草」「朝花夕拾」などをまとめる仕事にふけたが、7月市教育局主催の講演会で講演したのを最後に、9月広東を出、10月初め上海に着いた。なお「魏晋の気風及び文章と薬及び酒の関係」と題するこの講演は、六朝の文人の生活と思想を鮮やかに浮かび上がらせた中に、国民党批判も盛り込んだもので、魯迅の並々ならぬ学殖と現実批判の眼との見事な統一の例として知られる。

「革命文学論争」と左翼作家連盟

上海に来た魯迅を待っていたかのように、「革命文学論戦」が始まる。創造社・太陽社などの若手が、真の革命文学はプロレタリア文学でなければならないとし、魯迅や・盾らを、過去の暗黒しか描けない小ブルジョア文学者とする批判を展開したのである。魯迅も・盾もこれに反論、他の文学者も加わった「革命文学論争」が起こる。魯迅の反論は、単に彼らの公式主義や政治主義に反発したのではなく、彼らの論が実は文学論としても革命論としても安易であることを衝いた点で際立っている。一方彼自身、ソ連の文芸理論や作品を精力的に翻訳、文学の階級性・政治・革命との関わりなどについても、多くの評論を書いた。

「革命文学論戦」は、中共党内にも創造社・太陽社の魯迅に対する態度に批判的な見解が出てきたことなどによって、28年後半から収束に向かい、30年3月左翼作家連盟（左連）が結成される。魯迅はその成立大会に出席して議長をつとめ、講演をしたほか、その常務委員にも選出された。これにほぼ半月先立って、中共のイニシアチブで組織された「自由運動大同盟」にも参加、このため国民党支部から逮捕を申請されるなどもあった。

「5烈士」事件

左連は国民党のはげしい弾圧を受けた。31年1月には二十数名の共産党員が集会中逮捕され、2月に処刑される事件が起こっている。魯迅がその誠実さを愛し信頼していた柔石や、詩人の殷夫、女流作家丁玲の夫胡也頻等、左連のメンバーだった5人もそれに含まれていた（左連5烈士とよばれる）。この時は魯迅も一時日本人経営の旅館に危険を避けた。処刑の報を聞いたとき、彼は旅館の中庭に独り立ち、「私がよき友を失ったこと、中国がよき青年を失ったことを重く感じた。」そして1年後、「若い者が年寄りを記念するのではなく、この30年間、私は多くの青年の血を見せられた、それが幾重にも重なり、私はそれに埋められて呼吸できない。……これは何という世界だろうか。」（忘却のための記念）と書いた。

晩年の魯迅

1936年に死去した魯迅にとって、30年代は晩年ということになる。しかし、この数年は晩年という言葉が連想させる静かなものではなかった。まず31年の満州事変、32年の上海事変、「満州国」建国と、日本の中国侵略が本格的に開始されたのがこの時期である。その後も33年の関東軍による「熱河作戦」のほか、華北に傀儡政権を作る試みが繰り返されるなど、日本の侵略は深刻化し、これにともなって抗日を要求する世論も次第に高まりつつあった。国民党政府は、内部に根強い反蒋介石勢力を抱えながら、ともかく統一政権として、政治的・経済的に安定度を増していたが、「先ず内を安じ、後に外を攘（はら）う」を方針として、日本に対しては妥協的態度をとる一方、国共合作の崩壊後共産党が江西省に作っていたソビエト地区には、包圍攻撃を繰り返し、上海の左翼文化運動にも暗殺・拉致を含む弾圧を続け、出版物に対する厳しい検閲制度を布いた。

この時期の魯迅の言論の相当部分は、こうした国民党の政策に抗議・批判することに向けられている。

左翼の側も、多くの弱点を抱えていた。共産党の活動が困難になるにつれ、左連にその代行する役割を求める傾向が生まれ、左連の幅を狭めた。運動が困難にぶつかるとともに、一部には転向者も生まれ、内部の意見の相違も多くなり、それが相互の人的不信にまで拡大する場合もあった。当時、上海の黨員文学者の中心にいた周揚らと、魯迅の身邊にいた胡風らとの対立などがその例だった。この対立は、彼の死の直前まで続いた、抗日のための文学者・芸術家の統一戦線をいかに組織するかをめぐる「国防文学論争」にまで影を引いている。

この時期は、彼自身の安全も、国民の中での彼の信望と弾圧の効果とのかなりきわどいバランスによって保たれているものだったが、その中で彼は多数の筆名を使い、時にはかなり激しい苛立ちや失望を漏らしながら、ねばり強い言論活動を続けた。

「故事新編」

晩年の仕事として重要なものに、「故事新編」がある。神話・伝説・歴史に材をとった短編集で、8篇からなる。内1篇は22年、2篇は26年の作だが、後は34年に1篇、35年に4篇が書かれている。この作品集は、原資料に忠実すぎるくらい忠実によりながら、他方執筆当時の文化界の現象に対する風刺が大胆に書き込まれているなど、読者を当惑させる面があり、日本でも中国でも論議が繰り返された割に、万人を納得させるだけの定論を見ていないが、ここでは、畏友木山英雄の見解の一説を引いておく。「ただ、そのような方法問題の前提として念頭に置くべきことがひとつある。それは、この作家が少年時代に『国民性』の名で直面した、衰え果てた老大明国民の民族的心性の伝統にかかわる問題、つまりそういうものへの愛憎激しく相表裡する関心が、結局彼の全文学生涯の根底を貫くことになった、ということである。……素材は古書の中に求められたが、ちょうど雑感で現実の個々の事象が歴史上の類例を呼び醒ますように、古書の記載のそれぞれに独自の伝承が単なる資料の域

を超えた何らかの典型として、生き生きと作者の現実感覚を刺激し、挑発する。作者の文献渉獵の丹念さは人も認めるところであるが、それらのエッセンスを実に巧みに採り入れるその抜かりのなさも同じ丹念さのうちというべく、あわせて作者における歴史と現実との交渉の深さを証している。」（『魯迅全集』）3巻「故事新編」解説 85年 学研）。

翻訳と美術

魯迅には、著作にほぼ匹敵する量の翻訳がある。したがって、彼の仕事を論ずるならその面での仕事の意味を述べなければ片手落ちなのだが、もう余裕がない。それに意味といっても、翻訳は多方面にわたっていて、とても簡単には述べられない。彼が自分の翻訳につけた解説・序文・後書き等が、「訳文序跋集」として「全集」に収められているので、それを参照していただきたい。

また魯迅には生涯を通じて、美術に対する関心があった。少年時代に挿絵のついた本を好んだことから、北京の教育部時代の「美術普及をはかる意見書」（これは狭い意味の美術だけでなく、文学・演劇も含んだ芸術一般を指すものだったが）を経て、著書や編集した雑誌の装丁についての関心、上海に来て間もなく柔石らと始めた朝花社での外国の画集・版画の複製の出版などにそれは表れている。特に31年彼が青年を集めて開いた木版画講習会は、多数の若き版画家を育て、中国における現代版画運動の出発点となった。

死

魯迅の健康状態は、34年秋ごろから悪化し始めていたが、36年春ごろから、特に悪化が目立った。若いときからの肺結核が悪化し、心臓性喘息の発作もしばしば起こった。微熱も続いた。体重も40kgを切った。主治医は日本人医師須藤五百三だったが、心配したスメドレーの世話で、アメリカ人のトーマス・B・ダン医師の診察も受けた。彼の診断は「極めて重症」であり、スメドレーの再質問に対して「おそらく1年はもたないだろう」といった。茅盾や内山完造などが、ソ連あるいは日本への転地療養を勧めたが、魯迅は承知しなかった。「今年大病をして、初めて死に関する予想をはっきりとするようになった。」と彼は死の1カ月前に書いている。36年10月18日の未明から、また喘息が始まり、朝、須藤の往診を依頼、須藤の希望で、福民病院の松井・石井両医師も加わって手当てをしたが及ばず、19日午前5時25分、死去した。満55歳になって1月たっていなかった。盧溝橋事件の9ヶ月前であった。遺体は上海西郊の万国公墓に葬られ、56年10月、虹口公園に移葬された。魯迅が生前よく散策したところだった。